

あるのにはない。ないのにある。

—展覧会「影を刺す光－三嶽伊紗+守屋友樹」に寄せて—

守屋さんの作品を見た時に、何故か急に忖度のことを思った。言わない、説明しないという不在が、忖度を生んでいるという場面をここ数年、日本の社会ではよく見かけたのではないか。不在が恐ろしいと思うのは想像力が働くからで、忖度は想像力があるからこそ生まれる文化だ。「あるのにはない」「ないのにある」という雰囲気を作る、というのはいつの時代にもある強権を発動するレトリックだろう。それが想像の範囲に収まっている間はいいが、そのうち事実とすり替わってしまうことが恐怖で、その正体がまやかしであるということを忘れれば、私たちはファンタジーの世界から戻って来ることができなくなる。守屋さんの作品は、不在といいながら、全くもって存在しているとしか言いようのないものが至るところにあり、その塩梅により、見えないものの恐怖というより、若干のユーモアと軽さを纏ったはだかの王様的な批評性を感じた。そして作家としての視線が定まれば、はだかの王様が誰か、ということを明確にすることができ、その批評性はより高まるのではないだろうか。あざ笑う商人＝作家で、王様自身とその側近たち＝社会の有様、パレードの見物人＝鑑賞者、あるいは別の配役も考えられるのかもしれない。今回の作品は、熊の痕跡が恐怖を想起するような形では表れていない、というところがポイントで、その軽さはとても重要な時代性なのだろう。

三嶽さんの作品は、ミニマルな静謐さとは裏腹に情感に強く訴えてくる力があり、実は油断するといつも泣いてしまう。何故だろうと思っていたが、「あるのにはない」ということから想起されるものが、より具体的に寂しさや強さ、生きているということの無常に直結するからかもしれない、今回の作品を見て思った。記憶とは、様々なものが重なり合ってその人の中で形成される物語でしかない、という現実を突きつけられているようであり、それは同時に、誰とも共有されることのない物語を生きる私の孤独と、少しだけ交わり重なった時の喜び、刹那の尊さとも連動しているのかもしれない。

三嶽さんは、展覧会前の打ち合わせの段階から「朦朧体」という岡倉天心が指導し、横山大観や菱田春草らが試みた近代日本画の技法のことが気になっていると述べていた。線を用いず、色の濃淡だけで表現する没線描法を指し、当時の批評家からは批判的な意味で「朦朧体」と呼ばれていたものだ。その技法を映像作品で独自に確立しており、幾重にも重なる像で輪郭はぼやけ、描き足された濃淡の影で、現実と幻想の間に現れる世界が立ち現れる。それはまさに記憶の有様のようでもあり、ひとは見たいものしか見ないし、理解したいものしか理解しないという現実を、淡々と描いているように感じた。

人工的に作られた月は、ゆらゆらとその姿を変えており、現実を写す鏡のようだ。白濁した液体と桃色の影であり光は、高度に抽象化された身体のようでもあり、大切な思い出や積み増さなった記憶なのかもしれない。化石は、タイムトンネルになってこれまで何度も何度かこの北ギャラリーで展示を行った過去と現在をつなぐ装置でもあるのではないか。

不在と存在、気配や痕跡は、守屋さんにも三嶽さんにも共通する要素だが、そのアプローチや向き合い方は全く異なる。似ているものを扱いながら、ここまで印象の異なる作品を対比してみることができた

のは、私自身にとってもよい機会になった。

去年よりも鑑賞する機会が減る中で、それが何であるかという事実を知ることと、それが何であるのかを考えるということの間には、想像以上の差があって、そのことに私自身が無自覚になりつつあるのではないか、という恐怖を感じる。理不尽な格差が妬みや不信を生み、世界は矮小化していく。この矛盾と向き合っているのが、2020年代の社会なのだろう。少しずつ狂い始めているという「予感に満ち溢れた世界」で展覧会を見て思ったこととして記しておこうと思う。

2020年11月4日 アメリカ大統領選挙の夜に

山本麻友美